

琉球大学学術リポジトリ

生産費を引き下げるにはどうすればよいか

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池原, 真一, Ikehara, Shinichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20613

1. さんまを買う時は必ず凍っているのをその場で開いてもらいます。冷凍魚はとがしてしまうと液が沢山出ます。ドロップといわれ魚の旨味、栄養分が沢山含まれています。冷凍魚が美味しくないと言はれるのはドロップさせてしまうからです。
2. 独得の生臭味はしょうが、ねぎ、酒などで消します。
3. おかずとしては1人当たり正味 100gはほしいものです。さんまは捨てられる分(頭、骨、内臓等)が30~35%ですから丸のままですと140g、即ち約40匁見当になります。

100g当り 食品	カロリー	水分	蛋白質	脂肪	ビ タ ミ ン			価 格	
					A (Iu)	B ₁ mg	B ₂ mg		C mg
さんま	207	64.5	20.0	14.0	120	0.05	0.10	2	5~6¢
豚 肉	145	71.0	21.4	6.5	15	1.00	0.12	2	12¢

(注) 価格は那覇市場

4. 上の表で見るとさんまは成分的に豚肉と殆んど同じで価格は半分ですが、栄養的にビタミン類に欠けていますから必ず野菜をたっぷり添えていただきますしょう。

(新 垣 博 子)

生産費を引き下げるにはどうすればよいか

1

1961年期の甘蔗の買上げ価格が農家の生産費をわる安い価格であるとして、農民代表がその引上げを交渉して以来、農家の生産費に対する関心は一層高まってきたが、生産費調査の結果は単に価格の決定資料として重要であるばかりでなく、経営の改善にまた重要でありますので、今後この方面にも大いに役立ててもらいたいと思います。

1962年期の甘蔗の買上価格についても生産費が問題となり、糖業審議会においては小委員会をもうけ再三に亘り審議の結果やっとその案が決まり価格の決定をみたようであります。それに引續いて今度は砂糖の貿易自由化問題が持ち上り、それに対する合理化対策が目下政府でしんけんけんとうされており、自由化に対処するため原料供給者である農家も、加工業者である工場も一体となって生産費の引き下げに当らねばなりません。日本市場において世界一高い砂糖という汚名を返上する上からも是非とも生産、加工両面からの合理化により生産費の引下げを断行し、安くてよい砂糖を本土に送り、

もって外国糖と競争していかなければならないと思えます。それにつきまして蔗作農家がよい甘蔗を安く生産するために生産費をどのようにして軽減したらよいかというところについて紙数の範囲内で申し上げたいと思えます。

2

生産費の費目の中には、一定費と変動費という二つの区別があります。一定費というのは生産量が多かろうと少なかろうと、その費用がほぼ一定しているもので、例えば種苗費、自家畜力費、農具費、建物費などの如きものであります。

変動費とは収量が多くなるにつれて費用も多くなるもので、例えば肥料費、雇用労賃、防除費などの如きものであります。

一定費は生産量が増加すれば、その単位当りの費用は減少することになります。即ち増取することによって生産費の引下げが可能ということになります。次にこの両費用の引き下げについてけんとうしてみたいと思えます。

(1) まず第一は多収穫によって生産費を引下げること

であります。一定費は 収量の多少には 関係ありませんが、変動費は収量の増加につれて多くなります。ところで、変動費の増加以上に一定費の引き下げが出来れば生産費は軽減されることとなります。

第 1表は多収穫によって一定費が著るしく軽減された例であります。

第 1表 多収穫農家と一般農家の生産比較

	一般農家		多収穫農家		備 考
	石当費用 円	割合 %	石当費用	割合	
変動費	8.26	27.0	9.94	41.0	1.昭和3年富民協会の調査による。
一定費	15.29	49.0	7.89	33.0	
自家労賃	7.48	24.0	6.31	26.0	
費用計	31.03	100.0	24.14	100.0	2.多収穫農家9戸、一般農家は117戸の平均である。
反当収量	2,100石		5.82		
石当生産費	28.41円		21.63		

即ち変動費は多収穫農家の方が一般農家に比して1.68円多くかかっていますが、一定費の方は多収穫農家の方が著るしく低く、一般農家のおよそ半分で7.40円も少なくかかっています。その結果石当り生産費においては、多収穫農家が一般農家に比して24%も軽減されていることがわかります。

次に甘蔗について申し上げます。第 2表は1960年期の甘蔗の生産費を一定費と変動費に分けて植付時間別に見たものであります。夏植、春植、株出の平均反当収量は6,113kgで、屯当り生産費は11.85ドルであります。今この反当収量を10屯まで高めることが出来、一方その費用は同じだと仮定致しますと屯当生産費は7.25ドルとなり増収によって4.60ドルの費用の引下げとなります。比率においてはおよそ40%の引き下げになるわけです。

つぎに6,113 kgの反当収量が10屯に増加し、その費用が2割多くかかったことにしますと、どうなりますか。その場合、生産費は8.45ドルとなり、前記の生産費に対しまして3.40ドルの引き下げになります。(比率において29%の減少であります。)これを夏植、春植、株出と比較してみますと、それぞれ3.37ドル、6.18ドル、30セントの生産費の引き下げとなり、多収穫がいかに生産費の引き下げに大きな役割を果すかと言う事がわかります。

第 2表 甘蔗生産費 (1960年期)

	夏 植		春 植		株 出		備 考
	屯当費用	割合	屯当費用	割合	屯当費用	割合	
変動費	4.35	33.8	6.86	43.5	2.83	28.9	一、夏植は一カ年に換算した
一定費	4.93	38.3	6.16	32.7	5.21	53.5	
自家労賃	3.60	27.9	3.75	23.8	1.71	17.6	
計	12.88	100.0	15.77	100.0	9.75	100.0	
反当収量	6,176kg		5,584		6,377		
屯当生産費	11.82弗		14.63		8.75		

(2) 一定費中の自家畜力費、農具費、建物費の如きものは、その利用度を高め一定費を多くの作物に分散させることである。例えば、畜力費において役畜を運搬や耕起のみに使わず甘蔗の溝廻りや中耕、培土、或は他の作物の作業にも広く利用すれば甘蔗の負担すべき畜力費は少なくなり費用の引下げになります。

(3) 大農具の如きはその手入れをよくし、取扱いをていねいにやることによって減価償却費を軽減すること。例えば、動力耕耘機の耐用年数は普通7年であります。その取扱いや手入れをよくやると耐用年数が10年に伸びれば、その費用は軽減されることとなります。

(4) 技術の改善によって、同一量の費用の効果を高めること。例えば、肥料の施肥方の改善や種類の選択、配合の方法やその割合などを合理化することによって同量の肥料でもその効果に差を生じ生産者の増加、ひいては生産費の引き下げになるのであります。

(5) 生産費中の購入材料を自給材料によって代用することである。購入肥料を自給肥料によって代用すれば運搬費や中間的費用がかからないため費用が安くつく。

1960年期の甘蔗の肥料費を 購入肥料と自給肥料に分け、それを比率で示せば夏植が57:43%、春植が54:46%、株出が86:14%となる。各期とも購入肥料の占める比率が高い、殊に株出の場合は9割近くまでが購入肥料によっていることがわかります。従って、この購入肥料費の何割かを自給肥料によって代用させることが出来ればそれだけ生産費の引き下げになるわけでありす。その外作業別投下労働量と雇用、自家労働との関係や自給、購入の面からの引き下げも考えられますが、そのけんとうは紙面の都合で次の機会にゆずりたいと思います。

(池 原 真 一)